

ネットワーク組織における協働のプロセスに関する研究 ―市民メディア・ネットワークにおける電子コミュニケーションの分析を中心に―

斎藤 進也

本論文の目的は、「ネットワーク組織」における協働によって、社会的に意味のある目的や成果が創り出されるプロセスを解明することである。

昨今、人々の自生的連結である「ネットワーク」の社会的インパクトが増大している。その背景にはインターネットに代表されるICTの存在があり、ICTを介した情報の発信や交換が現在のネットワークの中核をなしていると考えられる。本論文では、単なる連結に留まらず、協働の基盤として機能するネットワークを、ネットワーク組織と定義した上で、そこでの電子コミュニケーションに特に着目し、成員らの相互行為と組織原理について実証的考察を行うこととした。そして既存研究において蓄積が不十分な「ネットワークの発生から協働の基盤として機能するまでのプロセス」と「ネットワークにおける協調活動が活性化され、またそれが継続される要因」についての分析を本論文の主要課題とした。

本論文は、序章と結章のほか、6つの章で構成される。

第1章では、本研究の位置づけを明確にすることに主眼をおいた。ここでは、先ず具体的な事例を参照しICTに媒介されたネットワークの現実的諸相を把握し、次いで、社会科学におけるネットワークに関する議論の類型化をおこなった。そして、ボランティア・ネットワーク論に準拠し論を展開することを確認した。

第2章では、研究フレームの設定をおこなった。関連領域において協働のプロセスについての議論が十分に成熟していないことを鑑み、バーチャル空間におけるネットワーク組織を対象に予備的調査をおこない、本格的な調査を実施する上でのフレームワークを得ることとした。その結果、ネットワークを介した人々の相互行為の類型として、相互行為が現実社会における実践活動の文脈の上に成立している「CoP段階」、興味本位の情報交換が相互行為の中心となっている「CoI段階」、相互行為が成立するかは問題とされず、一方的に情報を発信あるいは入手することを目的とされる「情報の発信入手段階」からなる3段階モデルが提示され、このモデルを分析フレームワークとして設定した。

第3章では、方法論および調査対象の選定について論じた。本研究では、より多角的にネットワークの構造とプロセスを考察するため、ネットワーク分析、計量テキスト解析、参与観察の3手法を用いたトライアングレーションによるアプローチを実施するとした。調査対象については、第2章での議論を踏まえCoPとCoIの2つの側面を検討できるようこの2側面を併せもつネットワーク組織という条件のもと選定をおこなった。その結果、横浜市における市民メディア活動を主体とするネットワーク組織である「はまことり」を対象フィールドとすることとした。

第4章では、調査結果（データ）を概観し、調査対象組織「はまことり」についての基本的な理解を得ることに主眼を置いた。参与観察によって得られた情報をもとに、「はまことり」が結成された経緯や契機についての事実関係を確認し、また、計量テキスト解析の結果から、組織内のコミュニケーションの概況を把握した。そして、ネットワーク分析の結果から、「はまことり」の構造的特性について概説した。

第5章では、ネットワーク分析と計量テキスト解析によるMLログの解析結果について考察した。ネットワーク分析については、「協調活動が活発化し、またそれが継続される要因」を探るため、レスポンス数において上位のスレッドを抽出し考察した。その結果、特定成員のみが高い中心性を保持し続けるのではなく、複数の成員に中心性が移行していくという特性が発見され、またその重要性が示唆された。計量テキスト解析については、「ネットワークの発生から協働の基盤として機能するまでのプロセス」の考察に主眼をおいた。その結果、活動が実践的になり協働の組織として機能していくにつれ、いくつかの「区分け」が発生していることが示された。

第6章では、区分けの発生プロセスについて参与観察で得た現場情報を参照し考察した。その結果、区分けが発生する背景には、各成員らが他者と自身を相対化したうえで積極的な自己呈示を行い、組織における自身の位置取りを能動的に確保していく姿勢、すなわち「差異化」行為があることが示唆された。また、熟達者と未熟達者による区分けの発生により、ネットワーク組織がある種の徒弟制的な学習の場として機能しており、（１）成果を創出する上で必要な知識・技術の共有（２）参加者の動機付けの維持という２つの要素の保持につながっているという知見が提出された。

本論文において提出された、中心性の移行特性、あるいは差異化による区分け発生のメカニズムに関する見解は、ボランティア・ネットワーク論においてこれまで不明瞭であった協働プロセスを明らかにした点に成果があるといえ、また、より広い観点でいえば、自律多主体型組織のメカニズムの解明を目的とするネットワーク科学に対する含意を持つものであるといえる。